



TITLE:

京大広報 No. 215

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 215. 京大広報 1981, 215: 113-120

ISSUE DATE:

1981-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209471>

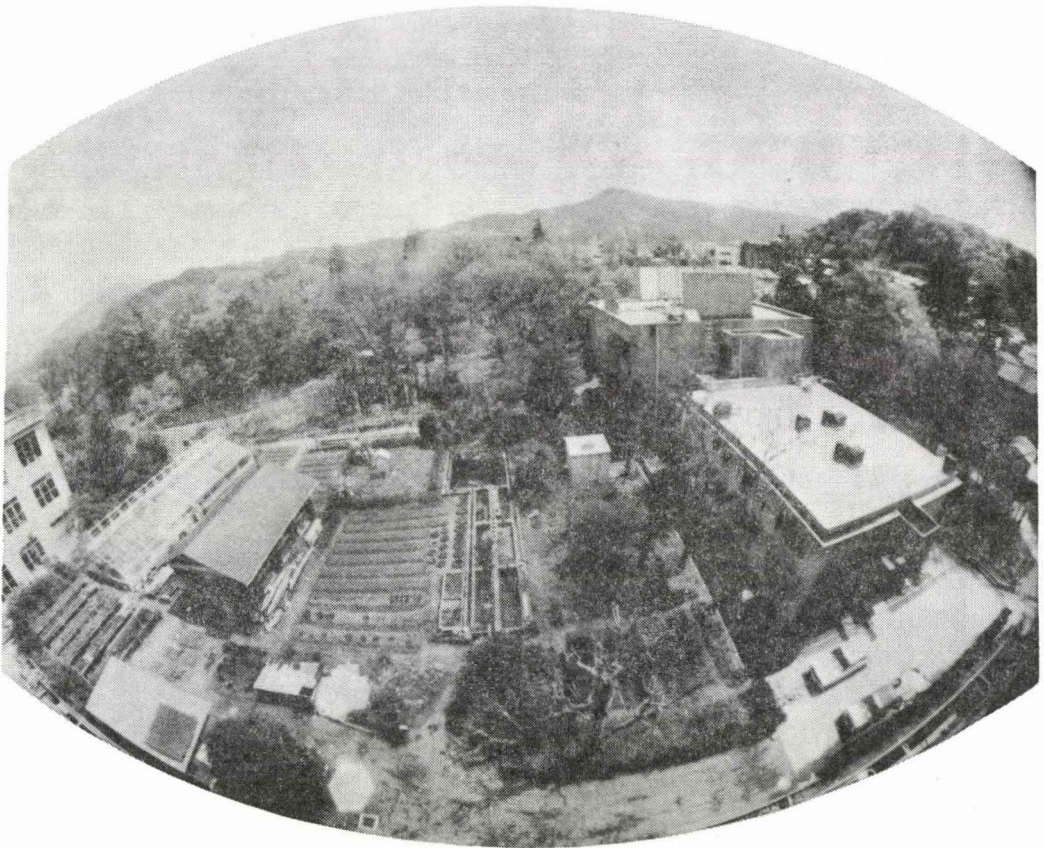
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 215

京都大学広報委員会



理学部・植物生態研究施設と植物園（数理解析研究所屋上から魚眼レンズを用いて撮影）

——関連記事本文 119 ページ——

目 次

学部入学式における総長のことば		
総長 沢 田 敏 男	114	
昭和56年度学部入学式	116	
昭和56年度大学院入学式	116	
医療技術短期大学部の入学式	117	
部局長の交替	117	
経済研究所研究棟増築工事完成	117	
＜随想＞		
在職時代の思い出抄…名誉教授 岡田 辰三	118	
＜紹介＞		
理学部・植物生態研究施設	119	
訃 報	120	

学部入学式における総長のことば

総 長 沢 田 敏 男

本日ここに、昭和56年度入学式を挙行し、2,515名のはつらつとした、優れた諸君を迎え得たことは、京都大学のみならず、国家社会にとっても大きい喜びであります。諸君の入学を祝い、その前途を祝福するためにご臨席いただきました本学名誉教授の先生方、各部部长並びに教職員の皆様に対しまして、新入生の諸君と共に、心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

新入生の諸君、おめでとうございます。諸君はこれまで学齢を重ね、学業を積み、多くの困難を克服して、めでたくこの京都大学に入学されたのであって、いま大きな喜びと共に、新しい希望に燃えておられることと思います。そのような諸君をみて、ご両親の皆様は、まだどれほどの喜びをかみしめておられることかと推量し、衷心よりお喜び申し上げる次第であります。

さて諸君、諸君自ら志向して入学された京都大学とは、いかなる大学でありましょうか。入学にあたって、京都大学の歴史や伝統・学風について知ることは、そこに学ぶ者の心構えや自覚を醸成する上で大変重要であり、また、意義深いことと思います。

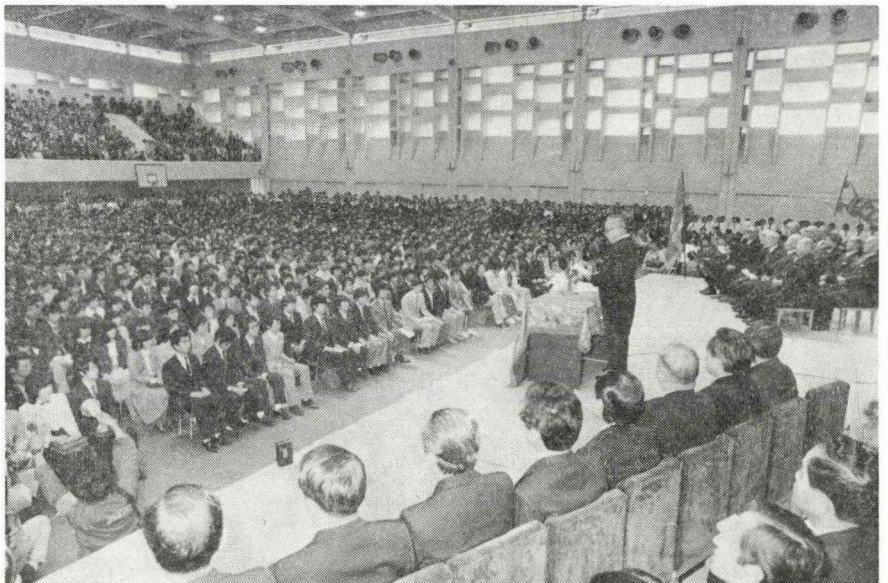
京都大学は、明治30年(1897年)6月18日に開学されたのでありますが、その創立にあたって、当時の明治政府や国会は、清新なる学術の発展を促し、真に学問をする大学を創設するべく建議し、開学したのであります。清新なる学術とは、すなわち、独創的な研究、創造性に富む学問・研究のことであり、また、真に学問をする大学とは、世に阿らず、真理の探求を目指すところの、純粋な学問の府ということでもあります。この大学創立の主旨が本学の建学の精神につながり、その後、歴代の教官や関係者に、アカデミックな学問・研究に対する強い使命感を意識させ、世に京都学派と称揚される学風を培ってまいりました。京都学派という言葉は、元文学部教授の内藤虎次郎(湖南)先生〔明治42年(1909年)～大正15年(1926年)〕の東洋史学に対して、当時在日中の郭沫若先生(元中国科学院長)が名付けられたのに由来すると言われています。しかし、その後は東洋史学に限らず、もっと広い意味で使われるようになったもので、京都大学の学問の風格、すなわち、学風をさす称呼となっております。たしかに京都大学の学風には一つの特徴が見出されます。それは、既成の学問を取り入れ、これを十分咀嚼した上で、そのいずれにもとらわれないユニークな理論や学説を生み出すやり方です。このような学風は、真に批判的精神をもって自由に行なう学問の所産であるといえましょう。また、真理の探求を使命とする大学においては、当然、学問・研究の自由が必要であり、そのためには、大学の自治が尊重されなければなりません。この学問・研究の自由と、大学の自治を確立するために、京都大学は大きな努力を続けてまいりました。いわゆる沢柳事件(1913年～1914年)や滝川事件(1933年)等は、思索の自由と教授の自由を含む学問の独立、研究の自由を確保し、大学の自治を確立するためのたたかいでありました。このように京都大学は、我が国の大学の健全な管理運営制度の創造と発展に寄与すると共に、進取的、独創的研究の多くの研究業績によって、真に人類の幸福に貢献する学問の府として、輝かしい歴史と伝統を形成してまいりました。本学は、今年創立84周年を迎えますが、この間、106,100名にのぼる学部卒業生と、17,300名の修士及び16,600名に達する博士を世に送り出しています。卒業生の中から、どれほど優れた学者が輩出し、また、偉大な学問的業績が生み出されたかは、あらためてここに例挙する必要もないと思います。諸君も真理を学び、人生の価値を模索するにふさわしい場として、京都大学を選ばれた訳でありましょう。諸君は、このような京都大学の歴史や伝統・学風をしっかりとみつめ、これを踏まえて勉学されるよう望むものであります。

さて諸君、大学において、学ぶということについて所感を申し述べてみたいと存じます。

大学における勉学に一番大切なことは、常に批判的精神を持って自主的に学ぶことであります。そしてなにもにも捉われぬ、自由な批判的な精神を身につけることであります。この批判的精神こそ、京都大学の建学の精神ともいえるべきものであり、本学では、これまで厳しい批判的精神に基づいて、学問・研究を深めることがなされてまいりました。大学は、当然のことではありますが、厳しい真理探求の場であります。この真理は、人間にとって、もっとも美しい、もっとも尊い、そして、もっともおごそかなものといえましょう。いわば、かけがえのない究極のものであります。しかし、この真理は、決して容易に求められるものではなく、何が真理かを見極める厳しい知的緊張を通じて、やっと探りあてうるものであります。また、科学技術の進歩発展の原動力となる創造や発見も、既成の科学技術に対する真摯な疑問や批判的模索から生まれるものであります。従って、この真理の追求、あるいは科学技術の進歩にとって、批判的精神は不可欠なものと申せましょう。この精神こそ、京都大学の学問の伝統を貫流し、その学風を形成してきた独特の気風、エトスとも言えるものであります。

しかし諸君、ここで大切なことは、批判的精神それ自体について、慎重に考えてみる必要があることです。そして、真の批判的精神を身につけることに心がけ、努力することです。まず、自らの道義的、科学的な在り方を厳しく問い詰める厳正さが必要となります。今日の社会においては、他人に対する批判は厳しく鋭いが、自己に向っての批判はルーズで弱いという人をしばしば見かけますが、このように自己に甘く、他人にのみ厳しい態度からは真の批判的精神は生まれません。また、自己の周辺に敵と味方とを安直に分けるような考え方も、真の批判的精神とは無縁のものであります。批判といっても、その物事や成果を全面否定することであってはなりません。批判は建設的、創造的でなければなりません。つまり本物の批判的精神は、自己が生き、自己が所属している世界や学問分野に対する愛情と、その世界や学問分野で、共に生きている人々に対する思いやりの心を持つことを、前提に成り立つものと考えます。従って、批判的精神とは、特定の立場に立って独善的に切り捨てることではありません。また、今日、若い諸君の中には、批判的精神を行動主義で示そうとしがちですが、このような行動主義は、えてして知的短絡ないし思考停止にほかならず、不毛な結果に終ることが多いのであります。このような安易な行動に走る前に、もっと内面的な充実をはかる必要があることを自覚し、自戒すべきではないでしょうか。

さて、批判的精神を養うためには、読書に基づく柔軟な思索が不可欠であるように思います。こういう思索や読書こそ、古今東西を通じて変らない大学生の特権でもあるといえましょう。どのような書物を読むべきかという読書の正しい在り方は、難しいように思いますが、しかし、古典といわれる優れた作品の中には望ましい批判的精神につながる考え方が満ち溢れています。私



は、諸君が、思想や文学の世界の優れた古典と取り組まれることをすすめるものであります。さらに、科学技術に志すものとして、その科学分野の歴史、すなわち科学史を学び、発達の過程を正しく認識することによって、その科学の原点にも通じ、現代科学技術の在り方や姿勢について、正当な批判と評価をすることができると思います。読書というものは、食べ物と同じであって、読むことよりもこれを消化し栄養にすることの方が肝心であります。そのためにも、決して主体性を失わず、個性的な知的模索の軌跡を描くことが大切であるといえましょう。

諸君がこれからの大学生活において、学問上はもちろん、政治、経済、社会の諸問題、諸現象に対しても、厳正な批判的精神を持つことのできるように、心がけて欲しいと思うものであります。

大学生活をより豊かにするため、京都の芸術、文化やスポーツに親しむことをすすめたいと思います。千年の古都、京都には、我が国の国宝や重要文化財の約20%があり、保存されています。諸君は大学生活において、努めてこれらの文化遺産に接し、先人の残された偉業や歴史を謙虚に学ぶことを忘れないで欲しいと思います。また、大学時代においてはスポーツを愛好し、より一層体力、気力の増進に努めるべきであると思います。カレッジスポーツの目的は、もちろん、少数の優れた選手を育成することのみでなく、また、技の巧拙や勝敗のみを競うことでもありません。その究極の目的は、スポーツマンシップを身につけた智、徳、体兼備の青年を養成することにあります。京都大学はこのようなカレッジスポーツの面においても古い伝統を持っており、かつてのオリンピック代表選手をはじめ、多くの名選手を育成すると共に、また、スポーツマンシップを会得した幾多有為の人材を養成してまいりました。そして、カレッジスポーツの真価の高揚に大きく貢献してきたといえましょう。最近の体育会を中心とする各運動部やクラブの活躍には目覚ましいものがあります。大学において学問とスポーツを両立させることは、それ相当の努力や工夫が必要でありましょう。しかし諸君、精進してやまぬ情熱を持って、この苦難の壁を打開するよう努めて欲しいと希望するものであります。

新入生の諸君、諸君はいわば大学に学ぶ“未来からの留学生”であるといえましょう。諸君が未来に生き、未来を創る担い手として育っているからであります。大学におけるこの“留学”期間中に、本当の批判的精神を身につけて、未来の世界に対する時代的適応性を修得されるよう希望するものであります。

一言所感を述べて式辞といたします。

(本稿は、4月11日の学部入学式における総長のことばを速記をもとにしてまとめたものである。)

＜大学の動き＞

昭和56年度学部入学式

4月11日(土)午前10時10分から、昭和56年度学部入学式が本学総合体育館において挙行された。

入学式は、名誉教授、教職員、新入生の父兄など臨席のもとに学歌斉唱、「総長のことば」と進行し、午前10時40分に終了した。

今年度の学部新入生数は次のとおりである。

文学部200名、教育学部50名、法学部333名、経済学部204名、理学部283名、医学部121名、薬学部81名、工学部947名、農学部296名、計2,515名(うち女子学生230名)。そのほか、3年次に25名の編入学生があった。

昭和56年度大学院入学式

4月11日(金)午後3時から、昭和56年度大学院入学式が本学総合体育館において挙行された。

入学式は、名誉教授、教職員など臨席のもとに

学歌斉唱、「総長のことば」と進行し、午後3時25分に終了した。

今年度の大学院新入生数は次のとおりである。

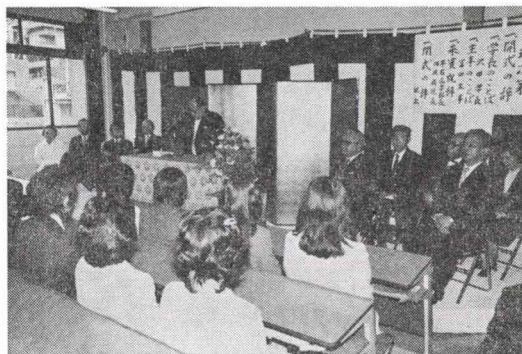
研究科	修士課程	博士後期課程*
文学研究科	76名	5名
教育学研究科	15	1
法学研究科	21	1
経済学研究科	14	3
理学研究科	134	5
医学研究科	—	64
薬学研究科	31	1
工学研究科	540	11
農学研究科	99	7
計	930	98

* 医学研究科は博士課程

医療技術短期大学部の入学式

医療技術短期大学部では、4月9日（木）午前10時から、本短期大学部大講義室において来賓、父兄等臨席のもとに昭和56年度入学式を挙行了した。

式典は、「学長のことば」に始まり、「主事のことば」に続いて来賓祝辞と進行し、午前10時25分に終了した。



医療技術短期大学部入学式

今年度の新入生は、看護学科78名、衛生技術学科40名、専攻科助産学特別専攻19名で計137名である。

（医療技術短期大学部）

部局長の交替

農学部長

苦名 孝農学部長の辞任に伴い、その後任として深海 浩農学部附属農薬研究施設教授（農薬製造製剤学研究部門担当）が5月1日任命された。任期は、昭和58年4月30日までである。

防災研究所長

若林 實防災研究所長の任期満了に伴い、その後任として芦田和男防災研究所教授（砂防研究部門担当）が5月1日任命された。任期は、昭和58年4月30日までである。

<部局の動き>

経済研究所研究棟増築工事完成

経済研究所では、昨年9月に着工した研究棟4階部分の増築と全館の改修工事が完成し、4月13日（月）、沢田敏男総長はじめ学内外から約70名の出席を得て、竣工披露式を挙行了した。

増築された4階部分は472㎡で、教官研究室10室、共同研究室1室、セクレタリー室1室、タイプライター室1室からなっている。なお、4階部分の増築と同時に、既設の1階から3階についても改修、模様替が行なわれた。

増改築にあたり、関係各位の多大の御尽力、御

支援をいただいたことに厚くお礼を申し上げます。

（経済研究所）

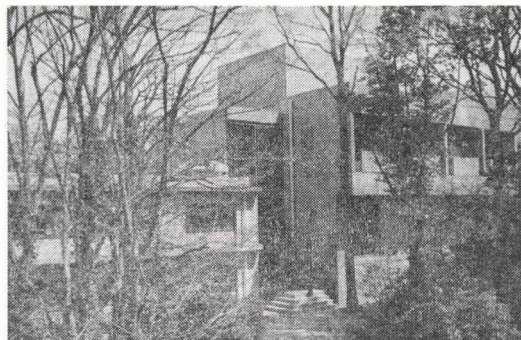


〈紹 介〉

理学部・植物生態研究施設

本研究施設は、京都大学北部キャンパスの東側にある理学部附属植物園内に設置されている。植物生態学を看板とする研究機関としては我が国唯一のものである。昭和39年4月に開設されたが、同時に附属植物園の管理が理学部植物学教室から本研究施設に移されたので、生態学的研究に不可欠なフィールドとして植物園を利用できる恵まれた研究施設として発足することとなった。本館と実験用水槽は、昭和40年度に植物園内南西部の一角に新設された。昭和47年度に一部門が増設されたため、植物生態学部門（既設振替）と特殊環境生物学部門（新設）の2部門構成となった。そして教官2名の定員増が認められ、両部門とも教授、助教授、助手各1名となった。新設部門には、ノートバイオトロン（無菌条件下生物実験装置）が、昭和49年度の本館の増築時に学内共同利用設備として設置された。

現在、植物生態学部門では、植物生態学全般にわたって研究が進められているが、植物の生活内容を種の段階で比較生態学的に研究して植物群落の構造と動態を明らかにすることに重点が置かれている。特殊環境生物学部門では、高等植物の発生・分化過程とそれに対する環境要因および植物ホルモンによる制御機構に関する研究、昆虫の発育制御機構の生理化学的研究などが進められてい



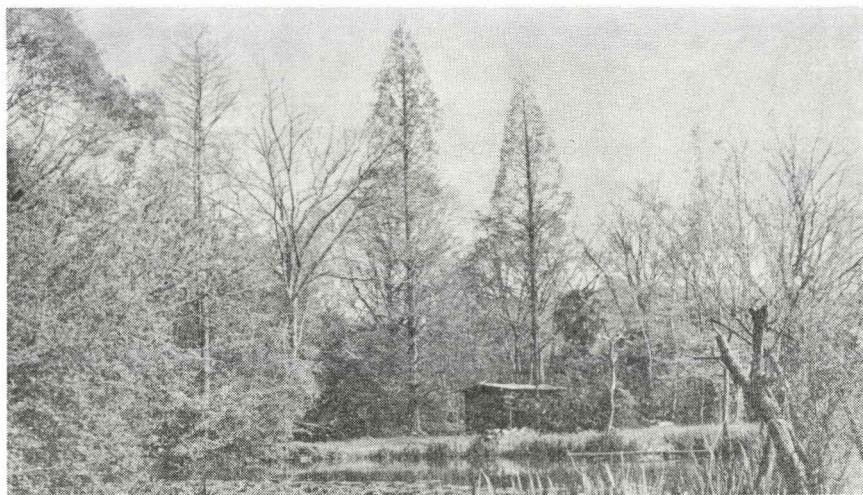
理学部・植物生態研究施設

る。両部門の教官は、大学院学生の研究指導にあたりとともに、理学部における学部学生の講義・実習を担当している。

ノートバイオトロン設備は、高等生物の無菌条件下における生理や微生物との相互作用を研究するためのものであり、その主体は高性能の集塵能力を持つフィルターを備えたノートキャビネットであり、このキャビネット内またはこれが置かれている実験室内の温度、湿度、光周期が制御できるようになっている。

植物園の現在の有効面積は約1.6haである。小規模な植物園であるが、単に各種植物を集めて栽培するだけでなく、多様な自然立地のモデル化を構想して創設され整備されたので、いわゆる生態植物園としての特徴を持っている。園内には日本産の植物に中国、東南アジア、ヒマラヤなどからの貴重な植物を加えて約1,000種の高等植物が集

められており、また池、築山、岩山、洞穴、砂丘などが計画的に配置されている。本園は一般公開の植物園ではない。学内では理学部だけでなく他学部からも、生物学分野の研究・教育に広く利用されている。実験材料の提供は学外に対してもなされている。現在の悩みは、創設時でさえ広くはなかった植物園の敷地がますます手



1950年 R. W. Chaney 教授（元カリフォルニア大学教授）から贈られたメタセコイア。これを母樹にした苗木が各地に配られている。

狭になり、植物園としての機能が十分には発揮できなくなっていることである。

本研究施設の現在の人員構成は、専任教授1名(定員2名)、併任教授4名、専任の助教授・助手各2名、技官2名、事務官1名であり、大学院学

生16名、研修員3名が研究指導を受けている。将来構想として、生理学分野から生態学分野まで一貫して研究できる総合的な研究施設へ向けての整備拡充が考えられている。

(理学部)

訃 報

西村 敏雄(医学部教授・医学博士)

4月20日逝去、61歳。本学医学部卒。昭和36年本学医

学部教授就任。同51年～同55年の間医学部附属病院長を併任。専門は婦人科学産科学。

